

中国人の 善と悪は なぜ逆さまか 宗族と一族イズム

石平 産経新聞出版

正義派知識人の A 教授はなぜ、親族の腐敗を喜んだのか～まえがきに代えて～私の出身地の四川省成都市には多くの親戚が住んでいる、その中には親戚一同から一目置かれている家族があり、父親は学問的業績と名声のある大学教授で息子や娘たちは皆、良い大学を出て政府機関や大企業に勤めておりエリートの一族である、哲学部出身の私にとっては教えを乞うべき大先生である。

自分が北京大学に学んでいた時代から成都に帰省するたびに A の警咳に接して日本に留学してからも成都に帰省するたびに日本からの手土産を手にも中国国内の社会情勢や学問事情などについてご教示を頂くのが常であった。

教授の家を訪れるたびに共産党幹部の腐敗問題に強い関心を持ち知識人として「腐敗蔓延が結果的に政権の崩壊、天下大乱につながるから党中央が本腰を入れて強く取り締まらなくては中国は危ない、国が亡ぶ」と。

教授自身は大の愛国者として知られており、中国共産党の支持者でもある。

しかしこのイメージが完全に崩れた。

教授の娘の一人は成都市の政府機関に勤め、夫は名門大学を卒業し私自身も共に飲み、麻雀して非常に人当たりのいいお二人という印象であった。

2000 年代初めに娘さんから「新居引っ越しのお祝いホーム・パーティをするから石平さん来ないか」と誘われ、その場で「行く」と約束した。

その夜実家に帰って母親にその事を話すと「あの新居は凄いよ、市中心部の高級マンションの一番上の部屋で私達には手が出ない、賄賂だよ」と云われてびっくり仰天した。

実は A 教授の娘さんの夫は前年に地方税務局の局長に就任、地元きっての民間大企業の経営者が巨額の脱税を見逃して貰い高級マンションを家電・家具付きでプレゼントした、という、A 教授は怒らないのかと母親に聞くと「何に怒るのか？」と聞き返されて私の胸のモヤモヤ感は強まるばかりだった。

招かれた親戚たちが続々と集まりこれ程豪華なマンションが出来たのかと驚嘆の連続であり、A 教授はずっと上機嫌で得意満面の様子であった。

善悪に関する中国人のダブルスタンダードは正に驚くべきものがある。

中国問題研究が専門の私はずっと、前述のような問題意識を持って「家族・親族」をキーワードとする大量の文献を読み、歴史と伝統の視点から中国人の「家族感」「親族感」を探ってみた。

中国伝統の「宗族」と「一族イズム」がどれほど恐ろしく戦慄すべきものか！そして、それがいかに強い生命力を持って中国の大地に根差して中国人の

思考と行動を支配しているのか行動原理が分かるのが本誌のキーワードである。

第1章 一族の為であれば腐敗は善になる

～中国の腐敗はスケールが違う

習近平政権はこの5・6年間、共産党内の腐敗摘発に全力を挙げてきている。そのおかげで共産党幹部による収賄等汚職の恐ろしい実態が一般国民と国際社会の知るところとなった。

腐敗幹部の筆頭、元政治局常務委員の周永康のケースは2012年引退する迄に14年間収賄三昧で差し押さえられた資産は約1兆49百億円2015年に無期懲役判決を受けた。

(日本では1976年田中角栄元首相がロッキード事件で5億円の収賄で震撼)人民解放軍の制服組トップの郭伯雄は全部で272億円相当でスケールが違う。

～共産党高官の妻は「収賄代理人」中国式腐敗の特徴は家族ぐるみ腐敗汚職だ。周永康の2番目の妻は26歳年上のオヤジと結婚したが夫の権力を精一杯利用して収賄に走り、要するにお金の目的の為に「権力と結婚した」わけである。周が序列7位の共産党指導者の一人として雲の上の一人となった後は、全国の公安幹部にとって最も接近しやすい「姉御」で彼らは地元の民間企業や企業家兼ヤクザの人達を恫喝して上納金を巻き上げ、犯した罪のみ消しに助力することで収賄を行う錬金術でその金はそのまます姉御のところへ行く、勿論、収賄した後、贈賄者の名前を夫に報告し、重要ポストへの抜擢を助言した。2014年に摘発され有罪判決を受けると姉御も懲役9年の実刑判決を受けた。息子の周濱は大金持ちの家から死刑囚が出ると、彼は替え玉を手配して半端でない報酬を手に入れ、刑務所や裁判所や公安の幹部達の懐にも渡している。このような家族ぐるみの腐敗は軍服組トップの郭伯雄の場合も同じである。人民解放軍各集団軍・師団のトップの任命権は彼にあり、妻の何秀蓮は郭の全権収賄代理人となっていた「今度は無理」の場合に郭は返金していた、又「全家腐」という流行語＝郭の息子正鋼はポストを活用して昇進したい軍人達から賄賂を取り、彼の2番目の妻も会社を立ち上げ軍需を一手に握ってぼろ儲け、軍の用地を民用地として安く払い下げ不動産開発で莫大な利益を得た。

～ノンキャリアでも一家全員でのケース

国家食品・薬品監督管理総局の副主任伊紅章は在任中356万円の賄賂を受け取り、大半は妻と息子が収賄した分であり、生物医薬品企業のB社の経営者白は、その主な贈賄元で100%審査を通過記録あり。

～「全家腐」は中国ならではの一大奇観

例えば日本の田中角栄は家族に3つの約束をさせ、有名な正妻「はなさん」は、つつましさこそが称賛されていて、愛嬢の真紀子さんにしても父親の権力を利用して収賄した様な話は一切ない。

汚職で訴追された仏のサルコジ元大統領もあくまで政治資金作りであった。

～林語堂は中国の家族と腐敗の関係を解説

清朝末期に福建省に生まれ米国、独に留学ハーバード大学等で哲学博士の学位を得た、帰国後には北京大学で教鞭、1936年に再び渡米、その前年に「わが国土・わが国民」を米国で出版、大ベストセラーで大きな反響（翻訳版は“中国＝文化と思想”講談社学術文庫）

林語堂は「中国人は個人主義の民族で関心事は常に自分の家族のみに向けられており、社会には向けられていない、家族に忠誠を尽くす肥大した心理」と

～中国人の「個人主義」は欧米流とは違う

林語堂は、中国人が個人主義の民族であると指摘し、欧米流の個人の自由や権利を大事にする個人主義ではない、自分たちの一族、家族のみに関心を向け、一族だけの利益を大事にし、家族に忠誠を誓う、社会の公益等には無関心で損なって当然が中国人の行動原理だ。

外の世界、つまり社会は所詮、個々の家族にとって「略奪物の対象」なのだ。

～「収賄汚職は家族にとって美德」で「全家腐」は中国人の家族感と深い関わり
個々の家族は社会全体とは正反対の倫理観と判断基準を持っているのであり、彼らは正に家族一段となって「悪」である筈の腐敗に邁進しているのである。

中国独特の家族感と行動原理を本書は名づけて「一族イズム」と呼ぶ事とする。

～悪しき「圈子文化」と一族イズム

社会全体の道徳基準と家族のそれは正反対、圈子は日本語でも放送圏や商圈があるように、日本でいう縄張りに近い言葉。

2018年3月人民日報は「近年以来摘発された、多くの腐敗案件を見るとその背後には往々にして圈子文化の暗影があり正に腐敗を生む温床の一つである」

更に「一部の幹部達は圈子作りに特に熱心で縁故を頼りに自分達の圈子作りに必死である、互いに政治資金を出し合って一緒に腐敗に手を染め利益を貪る、一方で何かがあったら互いに庇い合って一緒に追求の手から逃れる」と

～雪崩式腐敗と芋ずる式腐敗の背景

2018年5月「中国規検監察報」に「圈子文化という汚職源を一掃せよ」と論評、周永康の在任中は彼と彼の妻を頂きとした圈子は正に利益共同体として権勢を振り汚職、収賄三昧の日々を送った。

～一族イズムの源流「宗族」

周永康が摘発された後、彼の腐敗圈子は300人以上で、副大臣クラスの幹部は10名にも上って圈子でも主要メンバーだった。

「全家腐」と「圈子文化」の歴史を探っていくと必ずたどり着くのが宗族だ。

第2章 宗族という巨大組織の実態

～宗族という組織

近代以前の数千年間、特に農村社会に根を下ろして、中国社会を形作って来た。最初の開拓者から 5 代目、10 代目になると子孫が繁栄して幾つかの村を中心に数百戸、千人以上の一族人口が繁栄し益々増える。

祭祀を行う「祠堂」が必要となりお金を出し合い建設・運営、族会が出来る、族の中で最も人望のある有力者が「族長」に収まる、「族譜」の編纂をする。同じ祖先への崇拜を基軸に集団化、組織化、各家族を超えた宗族という集まり。～人口 1 万人を超える「義序村を本拠地の黄氏一族」は中国福建省の義序村本拠とする黄之復が 13 世紀中頃この地に移住、それ以降 800 年の歳月を経て 1 万人を超える大宗族となり周囲の 7 つの村を占領していた。

急速に発展したのは 11 代目が科挙試験に合格、中央官僚となり素晴らしい業績を残し、朝廷から表彰され、引退後は一族結集の為に族譜を編集し族規を制定、運営システムの整備にも尽力し、地域の発展にも大きく貢献し宗族として大きく繁栄した。

16 世紀にも科挙試験の合格者が数人出て地元の水路開設、地域の学校を設立する等、存在感と影響力を拡大し、地域のリーダー役に迄成長した。

18 世紀中頃から約 1 世紀中国は爆発的に人口を増やし義序黄氏は中国を代表する大宗族。

～宗族制度の実態とその社会的役割

福建省の閩県では 11 行政区の内 5 区で、その中の白湖区では 57 の村の内 39 が 4 つの宗族によって占められていた、内、名字を同じくする同族の戸数が 100 軒以上、人口が 5 千人以上の村 12 で、その中の一つに黄氏一族が宗族の本拠地とする義序村がある。

黄氏一族とは長年の対立関係にあった林氏一族は一つの村に集中して住んで 5 千戸を有する大宗族の一つに数えられている。

清朝末期の張海峰という知識人は自著で「現在の大宗族は至る所に多く見られるが、中でも山東、江蘇、江西、福建、閩東の各地では宗族の集団的居住の習慣が重んじられ多いものは 1 万家以上、少ないものでも数百家が集落を作って居住している」と、述べている。

宗族の役割には祠堂の管理、族譜の編纂、祭祀の開催以外に、一族内の優秀な子供を選び受験勉強の機会を与えて科挙試験合格させる、もう一つの大きな役割は、族内の統制を行う事である「族規」のルールを作り順守させて、違反した場合は「裁判」に欠け、一定の処罰を与えることも出来る。

族内の弱い者、病気になった者、生活能力を失った者等に対する援助と救済、あるいは孤児になった子供の扶養も宗族の大きな仕事である、財源は有力者や地主等の拠出により「族産」という共同財産を作り様々な予算の財源に充てる。大半の場合、族産の中心的な部分は「義田」と呼ばれる田んぼ、あるいは畑。

～宗族が生まれてくる理由

中国伝統の諸子均等相続制度で息子達が均等に分け、相続し皆が分家を作り、集団を作る。(日本の場合は長子単独相続制度)

中国の祖先崇拜は、血の繋がりを何より重大視(日本は家が大事で養子存続)

3番目の理由は、国家の頼りなさにある、大半の王朝に於いて中央集権の国家権力が及ぶ範囲は県(中心の町)という行政機関迄で、広大な農村部には法の統治も国家の行政サービスも一切届かない、その代わりに「皇糧」と称される年貢だけは国家によって農村部から取り立てられる、このような政治状況下では農村の人々が家族以外のより大きな権力の下に入って保護と救済を求めるのは自然の成り行きである、宗族あって、国家なし、という事なのである。

～宗族が長続き出来る理由は科挙制度=隋朝の581~619年に成立した官僚選抜制度で清朝崩壊迄の千数百年間、中国の若者達の立身出世の王道となった。

宗族が「義田」を財源に「義塾」で子弟の教育、一人でも多く科挙試験の合格者を出して官僚になってもらう事で、宗族の為に様々な働きを期待している。引退しても郷紳となり大きな影響力を行使、宗族の為に働くことになる。

～ある宗族の家訓を読む

族長には「清廉と有徳、公正で人望の高い者」族内の最高裁判官であり、厳しく処罰される、鞭打ち刑、最も厳重な処罰は追放だ。

～ある宗族の「族規」の実例=15項目とその説明がなされて正に一族の憲法
立宗主、拳族長、修祖廟、謹族墓、尽孝道・敬父母、重婚姻、和夫婦、睦宗族務実業、設義田、禁訴訟(官憲に訴えない)、禁博徒・売春、禁姦盜

～宗族の内と外への意識の違い

宗族の中で生きる個人と各家族にとって宗族は正に国家であって、秩序と保護、救助と救済、教育と司法等公共サービスの殆どを提供してくれる存在である。公の国家の存在はどうでもいい存在だ。

宗族制度こそが中国文化に根付いた腐敗等の悪を生み出した源流なのである。

第3章「械闘」に見る一族イズムの恐ろしい本性=宗族間の殺し合いは残酷だ。

～黄氏一族 VS 楊氏一族の械闘=1725年5月16日数時間の戦闘の結果、楊氏側から戦死者3名、負傷者数十名が出て、黄氏一族は大勝を収め、楊氏一族の山林の占領と強奪が続き、その後も戦闘が続き官軍が入る等残酷な生存競争で黄氏側は十数名の戦死者とリーダー格が捕虜となり両足を切断された。

～宗族以外はすべて殺すべき敵になる

清末から中華民国時代の初期に広東省新会県内で起きた陳氏一族と林氏一族の戦いは賭博でのトラブルで大喧嘩に2回の戦闘で死者58名2回目は1906年、3回目は1911年千人以上で戦闘し、4回目は1913年、5回目は1915年殺された者は100名以上、軍の派遣要請。

～今も中国人の腐敗に受け継がれている

1916年に6回目の戦闘では林一族は陳氏一族を徹底的に叩き潰すために武装
匪賊集団に大金を払って大砲や鉄砲をもって一方的な殺戮で一つの村だけで
100名以上が殺された、地方政府は買収されて一切動かなかった。

2日間で427名が殺されて若い女性百数十人が彼らの戦利品となった。

陳氏一族はこの地方から完全に消されて他所に逃走。

～宗族械闘はなんと今も行われている

2001年湖南省で陳氏一族と魏氏一族の戦い、2006年には江西省で1000人規模、
地方政府は武装警官を出動させた。

2009年湖南省に賭博場で喧嘩が原因で百人規模の一族対決、白昼堂々の合戦。

2012年江西省で陳氏一族と王氏一族が、それぞれ数百名がまるで合戦を展開。

2015年広東省で姚氏一族と張氏一族は用地確保のトラブルで大乱闘を展開。

(前編)